研究課題　小川八幡神社大般若経の文化資源化研究

研究経費　二二八万七二六〇円（前年度よりの繰越分を含む）

研究組織

　研究代表者　　　山口英男

　所内共同研究者　田島公・尾上陽介・遠藤基郎・藤原重雄・稲田奈津子・堀川康史・黒須友里江・小塩慶

　所外共同研究者　大橋直義（実践女子大学）・川尻秋生（早稲田大学）・坂本亮太（和歌山県立博物館）・竹中康彦（和歌山県立博物館）・傳田伊史（長野市立長野西高校）・西本昌弘（関西大学）・福島正樹（信州大学）・本郷真紹（立命館大学）・矢越葉子（明治大学）・李乃琦（日本学術振興会外国人特別研究員）

研究の概要

（１）課題の概要

　和歌山県紀美野町の小川八幡神社が所蔵する大般若経は、全六〇〇巻（現状は折本六〇〇帖）が現存し、約一二〇巻の奈良時代写経、約三八〇巻の平安時代写経を含み、一九七八年に学界に紹介されて以来、古代の文化史・地域史等に豊かな情報を提供する研究対象として注目され、本格的な研究利用のための詳細な原本調査が待たれていた史料群である。今般、関係諸方面の尽力によって環境が整い、本格調査の実施が可能となったことから、小川八幡大般若経全点の原本調査、赤外線撮影を含めたデジタル写真撮影、既存調査データの収集・整理等を行い、その成果を公表し学術資源化するとともに、小川八幡大般若経の成立・変遷・伝来等をめぐる多面的な研究を進展させ、その文化的価値を広く発信することを通じて地域・社会への研究成果還元をはかるものである。

（２）研究の成果

　・撮影した全巻のデジタル写真について、HiCatPlusから巻単位での閲覧利用を可能とした。  
・整理した調査データを整理し、『小川八幡神社大般若経調査概報二〇一九-二〇二一』に収録公開した。また、研究及び調査結果の概要を同書に収録した。

研究課題　賀茂別雷神社文書の調査・研究

研究経費　二二一万四九六〇円（前年度よりの繰越分を含む）

研究組織

　研究代表者　　　金子拓

　所内共同研究者　遠藤基郎・遠藤珠紀・川本慎自・林晃弘・石津裕之

　所外共同研究者　伊藤真昭・宇野日出生（京都市歴史資料館）・大山喬平・加瀬直弥（國學院大学神道文化学部）・久留島典子（神奈川大学）・五島邦治（京都芸術大学）・三光寺由実子（和歌山大学経済学部）・志賀節子・須磨千頴（南山大学名誉教授）・大東敬明（國學院大学研究開発推進機構）・高橋敏子・竹田和夫（新潟大学）・辰田芳雄（就実大学）・谷徹也（立命館大学文学部）・中川学（東北大学高度教養教育・学生支援機構・）・野田泰三（京都橘大学文学部）・藤田恒春（賀茂別雷神社史料編纂委員会）・三枝暁子（東京大学大学院人文社会系研究科）・山本宗尚（一般財団法人リモート・センシング技術センター）・横井靖仁（関西大学）

研究の概要

（１）課題の概要

　これまで史料編纂所では、賀茂別雷神社文書（京都府賀茂別雷神社所蔵）について継続的な調査・撮影をおこない、画像やデータの蓄積とその公開を進めてきた。賀茂別雷神社文書は、近年の京都府による調査で約一四〇〇〇点に整理されたが、史料編纂所ではこのうち四二二二点（二一二五〇コマ）のデジタル化を終えている（二〇二〇年度までのデータ）。  
同社文書については、文明8年（一四七六）の賀茂一社争乱といわれる祠官と氏人との争い以前のものは少なく、これ以後、江戸時代前期の寛文五年（一六六五）頃までの文書を非常に多く残している。本研究においては、この期間の文書約八〇〇〇点のうち、中世を中心に調査・撮影をさらに継続し、デジタル化・データベースからの公開（研究資源化）を進めるとともに、これらを用いた賀茂別雷神社、同社の文書、および同社の神事、組織、所領について、また、同社の文書を用いた中近世の政治史、文化史などの研究をおこなう。さらに今期は、有力社司家所蔵文書へも調査を広げて研究を行なう。

（２）研究の成果

　今年度は最終年度にあたっていたため、成果報告のための研究会を開催し、また、二冊目の研究成果報告書『続 賀茂別雷神社の所領と氏人』を刊行した。また、所内共同研究者および共同研究員が責任編集となって、賀茂別雷神社史料編纂委員会より『賀茂別雷神社史料３　賀茂神主経久記Ⅰ』を刊行した。  
成果報告書は、前冊同様、氏人組織や社領に関する中世および近世の研究、また、賀茂別雷神社を研究するうえで貴重な史料の史料紹介を収めたものであり、時代を問わず多様な関心から賀茂別雷神社文書に関心をもつ研究者が集まったからこその成果であると考える。  
さらに、國學院大学博物館特別展「都の神 やしろとまつり 賀茂別雷神社の至宝」展（史料編纂所協力、二〇二一年一月二七日～三月二六日）において、研究成果の一部を公開した。

研究課題　史料編纂所所蔵維新関係貴重史料の研究資源化

研究経費　二四〇万八二〇円（前年度よりの繰越分を含む）

研究組織

　研究代表者　　　小野将

　所内共同研究者　保谷徹・杉本史子・箱石大・水上たかね・立石了

　所外共同研究者　麓慎一（佛教大学）・岸本覚（鳥取大学）・谷本晃久（北海道大学）・白石烈（宮内庁書陵部）・福元啓介（尚古集成館）

研究の概要

（１）課題の概要

　本所が特殊蒐書として所蔵する維新関係貴重書史料群は、質量ともに国内有数のコレクションでありながら、一部を除き史料学的調査・研究は進展をみていない（デジタルアーカイヴ化も未形成）。本研究では対象史料群のうち、維新史料引継本（約二万冊、戦前期の維新史料編纂会が収集した史料群）・外務省引継書類（約三〇〇〇冊、政府から移管された江戸幕府の外国方関係史料）・史談会本（約二〇〇〇冊、旧華族諸家が複製収集した幕末維新史料群）、また、国宝島津家文書や島津家本のうち、幕末維新関係史料を対象とする。当該時期のそれぞれの地域を専門とする共同研究者を募集し、厳密な史料学的検討を加えつつ、各史料の記述内容を確認して解説目録の作成に着手する。明治維新への社会的関心をも見据えて、本研究の成果を公開し、来たるべきデジタルアーカイヴ化に向けての基礎的作業を実施する。

（２）研究の成果

　論文ほかにより成果を公開した。白石烈「『朝彦親王日記』補遺―文久二年（一八六二）九月四日条～十月八日条、元治元年（一八六四）十月三日条～十二月十五日条―」（『書陵部紀要』、第七三号、二〇二二年三月）は、宮内庁書陵部所蔵の「朝彦親王日記」写本についての翻刻で、紹介の部分（文久二年および元治元年）は初の活字化となる。原本が消失した宮内省編纂事業による謄写本（臨時帝室編修局本）を底本として、維新史料引継本により校訂しており、価値の高い情報を含む。本共同研究で追究してきた、複数所蔵機関にまたがる写本群の検討結果を反映することができた。また白石烈「孝明天皇宸翰と会津松平家―明治天皇への奉呈前後の背景―」（『福島史学研究』、第一〇〇号、二〇二二年三月）では、維新史料引継本や書陵部所蔵の編纂史料を活用することで孝明天皇宸翰の取扱いを検証し、幕末・明治の会津藩および藩主松平家の動向を解明することができた。  
　谷本晃久「蝦夷通詞とアイヌ語地名」（北海道博物館編『北海道博物館第5回特別展「アイヌ語地名と北海道」連続講座・特別フォーラム講演記録』、同館、二〇二一年九月）は、維新史料引継本所収の画像史料を活用したもので、当該史料は「蝦夷通詞」を明確に表示する画像として貴重なものと評価できる。歴博の企画展で展示されるなど、北方史・アイヌ史の貴重な素材となった。なお関連して、麓研究員による谷本晃久『近世蝦夷地在地社会の研究』（山川出版社、二〇二〇年）についての書評も、学会誌に掲載された。

研究課題　モンスーン文書・イエズス会日本書翰・VOC文書・EIC文書の分野横断的研究

研究経費　三四六万円（前年度よりの繰越分を含む）

研究組織

　研究代表者　　　松方冬子

　所内共同研究者　岡美穂子・岡本真・大東敬典・水上たかね

　所外共同研究者　大久保健晴（慶応義塾大学）・川西孝男（関西学院大学）・久礼克季（川村学園女子大学）・イサベル・田中・ファンダーレン・冨田暁（岡山大学）・中砂明徳（京都大学）・鍋本由徳（日本大学）・野澤丈二（帝京大学・准教授）・橋本武久（京都産業大学）・真下裕之（神戸大学）

研究の概要

（１）課題の概要

　本研究では、エスタード・ダ・インディア、イエズス会、オランダ東インド会社（VOC）、イギリス東インド会社（EIC）という、広域的で非（あるいは半）国家的な組織の、おもに一七世紀に本部とアジア拠点間で取り交わされた情報について、内容だけでなく、史料学的な観点からも、多角的な検討を加える。従来、南欧語史料・オランダ語・英語史料はそれぞれ別々の研究者によって担われてきた。しかし、近年、双方を視野に入れた研究が出始めている。こうした状況をふまえ、本研究は、共通のテーマについて専門を異にする研究者が密接な討論を行うことにより、そのような方向性を一層推し進める。  
現在グローバル化する世界の中で歴史学のあり方にも変化が求められているが、海外の動向の安直な輸入や評価への対応としてではなく、日本史学の内在的発展とその成果に基づき、今まで蓄積されてきた学知のつなげ方を刷新することによって、国際的な貢献を模索する。同時に、世界的な要請でもある厳密な史料読解に基づく研究を担える次世代の育成も目指す。

（２）研究の成果

　二〇二一年度は二回の主催研究会を開催し、会計史、東洋史、日本史、政治思想史、オランダ史など、学際的な討議を行うとともに、オランダ東インド会社史を専門とする海外の研究者との交流を深めた。また、本所による日本関係海外史料蒐集事業を総括する講演会を主催し、その成果と今後の課題を確認した。また、オランダ語史料の入門書を『オランダ語史料入門―日本史を複眼的にみるために―』として出版し、ディオゴ・デ・コオト著『アジアのデカダ集Décadas da Asia』、『蘭領東インド会社外交文書集Corpus diplomaticum Neerlando-Indicum』の翻訳成果を本所研究紀要に掲載した。

研究課題　東アジアの合戦図の比較研究

研究経費　二三八万五〇〇〇円（前年度よりの繰越分を含む）

研究組織

　研究代表者　　　須田牧子

　所内共同研究者　藤原重雄・金子拓・黒嶋敏・畑山周平・及川亘・林晃弘・岡本真

　所外共同研究者　板倉聖哲（東京大学東洋文化研究所）・井上泰至（防衛大学校）・鹿毛敏夫（名古屋学院大学）・高橋修（茨城大学）・高山英朗（福岡市博物館）・堀新（共立女子大学）・堀智博（東京都立大学）・山崎岳（奈良大学）・山田貴司（福岡大学）

研究の概要

（１）課題の概要

　一六世紀から一七世紀にかけて、大規模戦争や王朝交替を経験した東アジア諸国では、社会が混沌から安定に向かう過程で、戦争の記憶を視覚化する様々な画像作品が製作された。日本では一六世紀後半期における川中島の戦い・長篠の戦い・関ヶ原の戦い・大坂の陣などを題材にした合戦絵巻・合戦図屏風などが作成され、中国大陸・朝鮮半島においても、嘉靖倭寇・壬辰丁酉倭乱を題材にした戦勲図・武功図が作成されたことが知られている。戦勲・武功を顕彰するための合戦図の作成流行は一六世紀～一七世紀の東アジア三国に共通する動向であったとも言いうるかも知れない。こうした可能性を念頭に置き、本研究では一六～一七世紀を中心とした、東アジアの合戦図制作の動向のラフスケッチを試み、その展開・受容過程の共通性と差異の抽出を試みる。比較の視点を持つことで、これまで積み重ねられてきた倭寇図像研究・戦国合戦図研究に新たな切り口が生まれることが期待される。

（２）研究の成果

　本共同研究の検討対象の一つである蔚山合戦図屏風については、高精細スキャニングを行なって今後の研究基盤を整えるとともに、同系統の諸作品との比較検討、描き込まれた意匠の読み解き、関連史料の探索など、いくつかの切り口から手分けして分析を進めており、この成果については、関係諸機関と調整しつつ準備の整ったものを公表する予定である。  
　このほかの二〇一九年度から二〇年度にかけて共同研究メンバーが進めた研究活動については、各自で著書・論文などにより発表を進めており、その一部に、井上泰至編『資料論がひらく軍記・合戦図の世界』（アジア遊学262、勉誠出版、2021年10月）、井上泰至「戦国合戦図屛風と軍記」（中根千絵・薄田大輔編『合戦図　描かれた〈武〉』勉誠出版、2021年12月）がある。  
　また、『倭寇図巻』にかかる成果については、「倭寇図巻デジタルアーカイブ」として本所HPで公開し、いくつかの研究会・広報などを通じて、その内容について報告した。